

第 2 回検討懇話会 議論の骨子

1 アンブレプレナーシップ教育

(1) 課題認識

- 学校は子どもの社会に貢献したいという気持ちを育む必要があるが、今、人生そのものを教える人が子どもの周囲にいない。人生の魅力、厳しさ、社会貢献の重要性をきちんと教えるカリキュラムを構築しなければ、社会の要望に応えられない。

(2) 今後の基本的な取組方向

- 経営者や農家の子どもが起業する確率が高い理由は、挑戦する大人、社会にサービスを提供する大人が近くにいるから。早めに社会との接点ができ、学ぶ理由やコミュニケーションの重要性を理解し成長できる。そこを仕組みとして教えることが重要である。
- 自主性や起業家精神は、「有言」（課題の発見）と「実行」（問題解決）から生まれる。教員がお膳立てを整えるのではなく、子どもに自分で課題を発見させ、失敗する中で学ばせる。教育はサポートであり、自ら発見し学ぶ教育プログラムを創ることが重要。

(3) 具体的取組の提案

- 会社をつくり、起業活動を疑似体験させる取組は、小学校段階から進めることが可能である。
- 商品企画、資金調達、宣伝、販売等の活動の中で、全員参加型の授業を展開する。売り込みの仕方、デザインの工夫など、知恵を絞って活動させる。教科学習が得意でない子どももチャレンジし、活躍できることで、学習意欲に火をつけることができる。
- アンブレプレナーシップ教育のキーポイントは、青年会議所など地域の方々に手伝ってもらうこと。教員だけで進めるのではなく、実際にプロとして活躍している人に支援願う。それは地域の方々が自然に学校に入るきっかけにもなる。
- 自然体験などをアンブレプレナーシップ教育のプログラムに取り入れたい。1週間保護者から離れ、携帯やゲームからも離れ、合宿させるといったカリキュラムにしてはどうか。それが本当に保護者の求める、社会の求める教育である。
- 経済産業省が、アンブレプレナーシップ教育で予算を組み、全国公募もしている。これにトライしてはどうか。

2 地方創生教育

(1) 課題認識

- 人口減少の負のスパイラルを何とか止めたい。例えば県内の女子サッカーの中学生チームは四日市が全国的に強い。しかし高校がない。その中学生の強いチームの子はほとんど外に出ていく。それを止める方策が必要である。
- 地域から若者が流出するのは小学校段階からの教育の一つの総決算だ。学力の高い子どもは外へ出る傾向がある。自己の可能性に挑むのは、生き方として立派な選択だとしても、子どもが「自らの共同体を守り発展させる」ことに目覚める学力や教育の形成はいかにすべきかを今、考えなければならない。
- 地方創生で問題なのは、地方に対して自信や誇り持っていないこと。子どもたちは地方に何があるのかを知らない。教える側も教科書的に教えるのではなく、誇りを持って教えないと、子どもたちには伝わらない。
- 地方創生に向けて地域の方々が懸命に取り組んでいる中、三重県の教育者は、それに対しどれだけ真剣に向き合っているか。今、教育者の姿勢が問われている。
- 地方創生教育は、多様性を理解した教員の存在が重要である。教員の多様な経験が不足している。
- 小学校には地域学習の機会が多くあるが、中学、高校と進むにつれ、その機会が徐々に減っていくという課題がある。

(2) 今後の基本的な取組方向

- 地方創生教育は、少し遠回りでもDoingよりBeing、つまり、あり方やぶれない方針、いわば「教育の三重ブランド」をまず柱に据えるべき。やるが増えるほど、柱の存在が必要になる。「幸せを感じる心の教育がここにある」といった柱を据えたい。
- 教育は基本的な考え方が最も大切である。これからは質の向上が重要であり、まず県全体の方針として質の向上を大きく掲げ、人材育成に注力するということを、明確に発信すべきである。
- 地方創生の教育は、一人ひとりが夢や目標を持ち、多様な人たちがつながりあって取り組むことが大切である。それにより、その地域らしい教育が生まれる。大都市圏と比べるのではなく、自分たちの良さを自分たちで考え、進める必要がある。

- 地方創生で非常に重要なのは、他地域との交流。町同士の交流や、県外、海外との交流など、多様なつながりを持つこと。外部の目があるからこそ三重県の良さがわかる。
- 子どものものの見方、行動様式を形成する根底にあるのは歴史、文化、伝統である。そうしたものに早くから気づき目覚める地道な教育活動が、郷土への感謝や郷土愛、祖国愛につながる。生き方の根底をなすものに目を向け、それを子どもの行動パターンやものの考え方につなげていくことが重要である。
- わが町、わが県の強みを大事にしたい。三重県は人の役に立ちたいという子どもたちの割合が全国平均より高い。こういう強みをもっと掘り起こし、それを子どもたちに自覚させる。そのためには、まず大人が地域の良さや強みを自覚する必要がある。
- 地方創生のキーポイントは、若者から見て地域に活躍する場があるということである。自分が役立てる場があるということを実感すれば、子どもたちは地域に残る。「どうすれば子どもたちが活躍できるという気持ちになるか」という観点から、取組を検討することが大切である。
- 地域の魅力については、大人が見つけたことを押し付けるのではなく、子どもたちが自分で発見し、人に伝えたいと思うようにサポートしたい。
- 子どもが地域の文化活動や奉仕活動に家族で参加する機会を増やしたい。また、三重県の持つ自然環境、歴史的・文化的資源をいかにして生かすかという課題を子どもにぶつけてみたい。地方創生には今の大人が気づいていない着眼が必要である。
- 地方創生に向け、小学校、中学校、高校を通じて、三重県の素晴らしさを子どもたちに伝え続けていくことが重要である。

(3) 具体的取組の提案

- 学校にばかりいる者より、企業や海外の経験がある者の方が地方創生の教育に適している。教員が1年程度企業にインターンとして出るなどの取組を行ってはどうか。
- 文理融合型の情報科、情報デザイン学の研究教育の拠点を三重県につくってはどうか。欧米に遅れを取っているが、日本の将来にとって極めて重要な学問分野である。総務省の高度ICT利活用人材育成プログラムの開発事業でも大きく取り上げられ、日本学術会議情報学委員会でもビッグデータ時代に対応する人材育成についての提言があった。

- 三重県には高等教育の場として外国語学部・学科がない。グローバル化が進む中であり、企業・行政・教育機関が一体となって支援する体制が構築できれば、外国語学部・学科を創設し維持することも可能ではないか。
- 三重県にどういう人材がいて、地域資源があるのかをきちんと教える教材を作ることが重要である。
- 地域資源の解説は、物語性が重要である。表面的で簡単な説明は、記憶に残らない。
- 例えば松浦武四郎のことを、単に北海道の名付け親というだけではなく、吉田松陰が何回も足を運んでくるような立派な人だったということをストーリーとして子どもたちに伝えていくことが重要である。

3 家庭教育

(1) 課題認識

- 家庭教育を支援する取組は、かえって家庭の教育格差の拡大を招くおそれがある。今、保護者の意識水準の差が教育格差につながっているところがあり、支援事業を行っても、意識の低い保護者は参加が見込めないからである。
- 家庭を支える地域活動は、継続して誰がやるか、経済状況が変わってもコンスタントにできるか、事故が起きたときの責任は大丈夫か、といったところが課題になる。

(2) 今後の基本的な取組方向

- 家庭教育で重要なのは、家族一人ひとりが夢や目標を持っていること。それぞれがいきいきと生き、つながりあうことである。
- 家庭教育は家庭間の連携が大切。親・子ども・教員・地域の人・地域外の人等が話し合う場をつくることが重要である。多様な人がつながることで、自分は自分らしく頑張ろうということになる。
- 当たり前のことを当たり前にするというところから、家庭教育のあり方を考えたい。挨拶、身だしなみなどを、きちんとしつけ、教育する環境づくりが大切である。
- 東日本大震災後、相互扶助や地縁・血縁の大切さが再認識され、意識が大きく変わりつつある。統計数理研究所による日本の国民性の意識調査でも、日本人の勤勉、親切、礼儀正しさがこの5年間でぐんと上がった。こういうものが次の世代を育てていく。
- 保護者が元気で明るく節度があれば、子どもは安心して伸びる。保護者を元気で明るくするということが、家庭教育の充実に向けた取組の柱になる。
- DVを受けている子どもは、他人の家に行くまで、自分の状況が異常であることに気づかない。子どもを家庭に閉じ込めておくべきではなく、地域の存在が非常に重要である。家庭教育的なものをどう地域で実現するかという観点から考える必要がある。
- 世の中はらせん状に発展する。横から見れば上に上がり、上から見れば昔のものが復活する。寺子屋を現代のかたちはどう戻すか、午前は商売、午後は地域のために働いた江戸時代の働き方をどう復活させるかといった観点で考える。「過去、地域にあった家族的な仕組み」を探し出し、現代版に進化させるかたちで議論する必要がある。

- 地域の良さを、家庭教育、学校教育に活かすことが重要である。学校・家庭・地域を分けるのではなく、3つを現代的に問い直すことが、家庭教育や地域の再生につながる。
- 家庭を越えたコミュニティを学校の他にもう一つ持つことが重要である。そうすると自らとの比較の対象ができる。そのためにも、家庭と地域の企業との関わりを促進する視点が必要である。企業と連携して、家庭教育にもっと踏み込んでどうか。
- いじめなど学校や家庭の問題がきちんと社会に伝わるよう、風通しをよくする仕組みをつくりたい。そのためには、家庭や学校とは異なる、新しい人と話す場を設ける必要がある。企業や地域と連携し、家庭的な場を数多くつくることが重要である。
- 企業を巻き込み、家庭教育につなげていく取組を進めたい。素晴らしい企業がたくさんあり、三重にも家庭と結びついた企業活動の好事例がたくさんある。
- 共働きの多い現状を考えると、家庭教育支援の取組は土曜日を活用することが望ましい。放課後の活動をどのように充実させるかという取組もあれば嬉しい。

(3) 具体的取組の提案

- 全国的な先進事例は、①支援が必要な家庭への対応 ②未然防止の観点からの勉強会・講座 ③生活密着型の支援（スマホルール、子育てガイドブック等）に分類できる。
- 家庭教育の充実に向け、大きな効果のある取組を企画したい。例えば、「山村留学に親子で行く」、「農業体験に親子で取り組む」など。その際、参加しやすいようインセンティブを工夫する。良い評判が伝われば徐々に浸透していくのではないかな。
- 親の学びの場をつくり、そこに足が向きやすい工夫をすることが重要である。例えば、イケメンが語る家庭教育講座といった呼びかけを行ったり、家庭教育地域協力店の割引券がもらえるなどの「お得感」を持たせたりすることもアイデアの一つである。
- 保護者は幼稚園、スポーツ少年団、塾などでつながり、親しくなることが多い。例えば塾などの場を使って、家庭教育を支援するような仕組みができないか。また、幼稚園・保育所は毎日保護者の送迎があるので、その機会を積極的に活用できないか。地域や企業、社会全体が多様なかたちで家庭に関わるという視点が重要である。
- 市民をファシリテーターに育て、小学校区ごとのワークショップをもっと行えばいい。「生きる力の育成」のようなテーマで、コミュニケーションから始めてはどうか。

- 家庭の中での挨拶を励行することから家庭教育が始まる。家庭教育の勧めとして、熊本県の「家庭教育10か条」にならい、三重県版を作ってはどうか。
- 家庭教育的なものを地域で実現する考え方に立てば、「全寮制」は一つの方法である。また全寮制的なものを地域で進めるとすれば、例えば、スポーツクラブではお風呂に入ってから帰るなど、家庭的なものを持ち込むことを考えてはどうか。
- 学校・家庭をめぐる課題をコミュニティの力で克服できないかという発想でコミュニティスクールが登場した。この制度の活用を推進していくことが重要である。
- 各市町におけるコミュニティスクールの展開を促進するためには、そのメリット、デメリットを検証していく必要がある。また、この仕組みを家庭教育、学校教育の更なる改善にどうつなぐかという課題もある。粘り強くスピード感を持って進めたい。
- 家庭をサポートする地域のシステムが必要である。スクールカウンセラーや地域の相談役を活用したい。
- 地域で教育活動をしようという意欲のある人たちはいるが、実際にはいろいろな障壁があってできない。地域の学校の作り方のようなマニュアルがあると有益である。
- 保護者のいない子どもを対象にした福祉施設に、保護者のいる子どもも帰ってきて、一緒に家庭教育を受けることができるというような施設運営を検討してみてはどうか。保護者がいても、いないと同じくらい寂しい思いをしている子どもがきつといる。
- DVを受けた子どもの施設を増やしてはどうか。
- 企業に対し、従業員が家族が集まるような「家庭の日」を定めることを奨励してはどうか。
- 今、農業生産の場所を確保し、小中学校の子どもたちと農作業に取り組んでおり、これを学校や塾のようにして、英語や数学を、農作業を通して教えていこうとしている。補償の問題は、最初に保護者に念書を書いてもらって解決できる。
- 中長期的には、独自の理念の教育実現をめざす「チャータースクール」を実験的に認可することを検討してはどうか。

4 その他の視点

- 教育活動において、ホスピタリティ、コミュニケーション、チームワークが一つのキーワードになる。ホスピタリティは思いやりや心遣い。コミュニケーションは人とのつながり。チームワークは、互いに認め合って協力をするという共生のベース。

- 教育におけるコミュニケーションの環境づくりが重要。双方向のコミュニケーション環境がまだ欠けており、子どもの考え方をもっと聞いてあげたい。グループディスカッションなどにより、子どもに参加意識を持たせる環境を作ることが大切である。

- 幸福学の理論では、幸せになるための4つの要因がある。第一に、夢や目標を持つこと。第二に、感謝の気持ち、愛、つながりなどを持つこと。第三に、楽観的で前向きで自己肯定感が高いこと。第四に、人の目を気にしない、つまり、金・もの・地位を人と比べて幸せを目指すのではなく、それぞれが自分らしく生きること。